様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１２６６６

研究課題名（和文）近現代日本における籐家具のデザインと技術の体系化

研究課題名（英文）Systematization of Design and Technique of Rattan Furniture in Modern and Contemporary Japan

研究代表者
新井　竜治（Arai, Ryuji）

芝浦工業大学・デザイン工学部・教授

研究者番号：２０３８９８１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：近代日本初期の籐家具デザインは中国大陸から伝えられたものであり、日本全国共通で、籐編み模様などの細部で変化を付けていた。国産竹材と輸入丸籐（細い皮付籐材）による骨組みに、輸入皮籐/芯籐を巻き、座面・背面・甲板には皮籐/芯籐編みを施すもので、直線的デザインであった。
1930年代後半に太民籐材（太い籐材）の直輸入が本格化すると、太民籐材を骨組みとする曲線的デザインが台頭した。
日本の籐家具のモダンデザインは、1930年代ドイツの影響で発芽し、1940年代アメリカ・GHQの影響を受けて出芽して、1950年代Ｑデザイナーズ・剣持勇によって開花した。1980年代以降は、ポストモダンデザインも見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
戦前日本の中流階級上層部にまで広まり、戦後は一般大衆にまで浸透した籐家具は、自然素材を活用し、夏涼しく、軽量で持ち運びし易いため、高温多湿で、高齢化が進んだ現代日本住居に適した家具である。本研究の成果により、日本家具史の研究が発展するとともに、日本の籐家具のデザイン開発と技術開発の進展が期待される。また、籐家具のデザインと技術は全世界の多くの国々で独特の発展を遂げながら、相互に影響し合ってきた。これまで近現代日本の籐家具の体系的研究書の発行は皆無であり、本研究が日英両文で発行されると世界のデザイン研究者及びデザイン実践者に大きな影響を及ぼすことになると有望視される。

研究成果の概要（英文）：Rattan furniture design in early modern Japan was introduced from mainland China, and had some common types throughout Japan, with variations in details such as weaving patterns. It used bamboo and small diameter rattan for frames, binded with rattan peels, and seats, backs, and tabletops were woven with rattan peels. It was linear.
In the latter half of the 1930s, when the direct import of Tamin rattan (large diameter rattan) became full-throttled, curvilinear designs using Tamin rattan as frames emerged.
The modern design of rattan furniture in Japan germinated under the influence of German modern design in the 1930s, sprouted under the influence of GHQ and the United States in the 1940s, and blossomed in the 1950s by Q-Designers and Isamu Kenmochi. After 1980s, postmodern designs were also seen in Japanese rattan furniture.

研究分野：家具史

キーワード：籐家具・籐工芸・籐製品・籐椅子　西京丸・台湾椅子・海老椅子・三折寝台・長寝台　進駐軍・GHQ・Paul T. Frankl　Ｑデザイナーズ・渡辺力・松村勝男・剣持勇　全国籐製品新作品評展示会・全籐連展・籐竹　小菅恭太郎商店・小菅商店・小菅工業・コスガ　風間製作所・カザマ・マダムロタン　山川ラタン・ワイ・エム・ケー長岡

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

戦前日本の中流階級上層部にまで広まり、戦後は一般大衆にまで浸透した籐家具は、自然素材を活用し、夏涼しく、軽量で持ち運びし易いため、高温多湿で、高齢化が進んだ現代日本住居に適した家具である。

しかし現在、籐家具のデザインと技術の開発は停滞している。その理由の一つに、近現代日本の籐家具デザインと技術の体系的情報が明らかにされていないことが挙げられる。

大塚長四郎『籐工芸』誠文堂新光社 1939 年は、明治期から昭和戦前期までの籐家具デザインと技術を網羅的に記した研究書である。しかし、戦後の籐家具については映画セット用の籐家具という二次的資料を用いた限定的研究が実施されているだけである。戦前・戦後を通して、日本の籐家具のデザインと技術を体系的に記した研究書は未だない。

２．研究の目的

本研究では、近現代日本の籐家具のデザインと技術の特質と変遷を体系的及び時系列的に明らかにすることを目的とする。

（１）籐家具のデザイン

籐家具のデザインについては、籐家具形態（全体形状・細部意匠）、籐の編み方による表面模様、籐家具種別（安楽椅子・長椅子・寝椅子・卓子）、配置が想定される部屋などを体系的に明らかにすることを目的とする。

（２）籐家具の技術

籐家具の技術については、籐材（太民籐、丸籐、皮籐、芯籐）の使い方、結合部分の連結方法、軽量化技法、可動方法（折畳み・回転）、塗装種類、置きクッション材、籐材以外の材料とその使い方などを体系的に明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

（１）訪問調査

全国の籐家具メーカーを訪問して、各社所蔵の資料（籐家具現物・製品カタログ・設計図・製作図・記録写真・販売促進物・展示会写真・スクラップブックなど）を調査した。製品カタログ・図面・写真などは可能な限り全部借用してスキャンした。籐家具現物は全体と詳細部分を丹念に撮影した。籐家具製造工房では、写真撮影の他に、籐家具製作の模様（籐材の曲げ・編みなど）をビデオ録画させていただいた。具体的訪問先は、ワイ・エム・ケー長岡（山川ラタン後継会社：長岡市）、カザマ（横浜市）、みうらラタン（広島市）、カルチェラタン専属市村工房（大阪市）などである。

（２）文献調査

戦前・戦後の籐家具のデザインと技術を記した国内及び海外の図書を精力的に収集して渉猟した。これらの図書に記された情報と、訪問調査した籐家具メーカーの一次的資料（籐家具現物・製品カタログ・図面・販売促進物・記録写真など）とを比較して共通点・相違点を分析した。特に、海外文献との比較を通して、日本の籐家具デザインと技術の特質を把握した。

４．研究成果

本研究の成果は二部構成となる。

「第一部：近現代日本籐家具のデザインと技術の特質と変遷：通史編」では、幕末期から昭和戦後期までを７期に分けて、各期における籐家具デザインと技術の特質を明らかにした。

「第二部：主要籐家具メーカーのデザインと技術の特質と変遷：個別史編」では、コスガ、カザマ、山川ラタンを取り上げて、各社の創業期から現在に至るまでの籐家具デザインと技術の特質と変遷を明らかにした。

以下に各章の概要を記す。

【第一部：近現代日本籐家具のデザインと技術の特質と変遷：通史編】

（１）幕末期・明治期

幕末期・明治初期の古写真、及び明治後期の籐家具業者の引札・型録の精査から以下のことが判った。全体が籐材で仕上げられた籐製家具の種類は、肘掛椅子・スツール・長寝台・三折寝台などであり、細部意匠の種類は豊富であった。籐製肘掛椅子はさらに、①丸籐製鼓形スツールに

竹材の両肘・背を付けて全体を皮籐で巻いたもの、②竹材と丸籐（細い皮付籐材）で骨組みの大略形状を作り、骨組み全体に皮籐を巻き、背座肘などを皮籐で編んだもの、に区分できる。この他、木製フレームの背と座に皮籐編みを施した椅子があった[1]。

（２）大正期・昭和戦前期(前半)

明治・大正・昭和戦前期の代表的籐家具である西京丸・海老椅子・三折寝台・長寝台・角型/円型卓子等の原型が、19 世紀後半にアメリカに輸出していた香港の籐家具製作所のカタログの中に見つかった。西京丸の名称は、この形状の肘掛椅子が貨客船西京丸に採用されたことに由来する。台湾椅子は材料費・工賃が安価な台湾で製作された西京丸型の肘掛椅子である。籐製三つ折り寝椅子は冬場の収納に便利で一世紀以上継続して販売された[2]。

（３）昭和戦前期(後半)

昭和戦前期百貨店の籐家具は骨組みが竹材から太民籐材に替わったので、全体形状が角型から丸型に変化した。昭和戦前期後半は、骨組みに太民籐、構造補助材に四分丸芯・五棟の丸籐、編みに皮籐、巻きに半芯・背取が使われた。仕上げはラッカー・ラック・素地が見られた。クッションの生地・柄・詰物は多様だった。籐の編み方には、四ツ目編、網代編、煉瓦編、変編、市松編、(連結)堅矢来編、木目編、菱形編が見られた。籐家具種別では、椅子卓子 3 点セット、応接セット、三つ折寝椅子等が比較的多く見られた。籐家具は夏場の重要な商材であったが、広縁だけに置かれるものではなく、配置が想定される部屋は多岐に亘っていた[3]。

（４）終戦直後期

1940 年代末から 50 年代にかけて進駐軍家族住宅で使用された籐製ソファは、Paul T. Frankl がデザインして、1930 年代中頃以降全米で流行した籐製ソファの同等品であった。進駐軍 C.P.O. がこのデザインを採用した理由は、当時のアメリカ人にとって憧れであったスクエア・プレッツェル型肘掛付き籐製ソファを占領下日本の籐家具工場に作らせれば、双方の利益になると判断したからである[4]。

（５）昭和戦後期(1)

日本の籐家具のモダンデザインは、1930 年代ドイツの Erich Dieckmann の影響を受けた工芸指導所(剣持勇他)による研究に始まり、40･50 年代の進駐軍特需によるアメリカ(P. T. Frankl）の影響を経て、籐の材料特性把握から始めたQデザイナーズ（渡辺力・松村勝男・渡辺優）で開花して、剣持勇のバスケットチェア、産業工芸試験所の籐材と異素材との組合せへと続いた[5]。

（６）昭和戦後期(2)

全国籐商工業連合会主催・政財界後援で 1963～71 年に隔年で 5 回、東京または大阪で開催された「全国籐製品新作品評展示会」は、日本初の全国的規模での籐家具の新作品評展示会であった。受賞作品に見られた「細部の装飾を排除して、太民籐・幼民籐／丸籐・芯籐編みだけで構成する造形美、異素材との組合せ」というモダンデザインと新技術の特徴は、同展により全国に伝播した。しかし、芯籐編みバスケットチェアの模倣品が受賞するという問題も孕んでいた[6]。

（７）昭和戦後期(3)

1980 年頃から見られた日本の籐家具のポストモダンデザインの特徴は、オマージュ対象である元の椅子の輪郭を太民籐材の枠線によって表現すること、ポップな印象を与えるクッション材形状と裂地柄、パステルカラー塗装などであった[7]。

【第二部：主要籐家具メーカーのデザインと技術の特質と変遷：個別史編】

（８）コスガ

コスガは戦前期から、籐原材料の直輸入から籐家具・籐製品の製造・卸までを一貫して実施した。戦後 1970 年代以降は海外提携工場で籐フレームを生産する体制に移行した。戦前の同社の籐家具にはヴィクトリア朝風デザイン、シンプルなモダンデザインが見られた。同社の籐家具の籐編み模様の種類は少なかったが、これは大人数工場生産に適していた。コスガは籐フレーム形状とクッション柄でデザインに変化を付けた[8]。

（９）カザマ

カザマは戦前、横浜で製作して神奈川県内を商圏としていたが、1960 年代初頭以降、籐の原産地に近い、香港、台湾、フィリピン、インドネシアの提携工場での生産体制を整え、営業所網を日本全国に展開した。また、直売店マダムロタンのフランチャイズ店網を構築したり、直販及び特注籐家具営業専門のヨコハマアールロタンを設立したりした。同社の籐家具には欧米各国の伝統的デザイン、及びモダンデザインの影響が見られる[9]。

（10）山川ラタン

1952 年創業(株)山川ラタンの籐家具のデザインと技術は、1987 年以降(株)ワイ・エム・ケー

＆(有)山川ラタンへ、2011 年以降(株)ワイ・エム・ケー長岡へと継承された。山川ラタンは、創業当初から外部・社内デザイナーの籐家具デザイン開発に努め、良質なデザインは海外・国内で高く評価された。また、家庭用・業務用のあらゆるインテリアに適合する籐家具の品種を開発した。さらに、あらゆる籐材（太民籐・丸籐・芯籐・皮籐）の材料特性と力学を熟知し、異素材との組み合わせも積極的に実施して、卓越した造形を実現した [10]。

【結論】

（11）近現代日本の籐家具のデザインと技術の特質・変遷

①近現代日本の籐家具のデザインの特質・変遷

近代日本初期の籐家具デザインは中国大陸から伝えられたものであった。戦前期日本の籐家具の全体形状には共通の型（西京丸・海老椅子・長寝台・三折寝台など）があり、背面・座面・肘脇などの籐編み模様で各工房の違いを表出していた。そして、昭和戦前期末までに多くの籐編み模様の図柄が考案されていた。

竹材と丸籐の骨組みに皮籐/芯籐を巻き、甲板・背面・座面などに籐編みを施した籐家具では、全体的に角型のデザインが多かった。昭和戦前期後半（昭和 10 年代）に太民籐材を骨組みとした籐家具の開発が盛んになると、曲線を多用したデザインが見られるようになった。

独特な全体形状を持つ籐家具デザイン開発は、戦前の工芸指導所でのドイツ・モダンデザイン研究を発芽とし、終戦直後期の GHQ によるアメリカ・モダンデザインのスクエア・プレッツェル型肘掛椅子の特需で出芽して、戦後 1950 年代末、Qデザイナーズ（渡辺力・松村勝男・渡辺優）、剣持勇によるジャパニーズ・モダンデザインの籐家具のデザイン開発で開花した。そして「細部の装飾の排除・シンプルな編み模様、太民籐・幼民籐／丸籐・芯籐編みだけで構成する造形美、異素材との組合せ」は、1960 年代の全国籐製品新作品評展示会を通して全国の籐家具業者へと伝播した。

1980 年代以降、日本の籐家具においても、太民籐材の枠線によるオマージュ対象の表現、ポップな印象を与えるクッション材形状と裂地柄、パステルカラー塗装を特徴としたポストモダンデザインが見られた。

②近現代日本の籐家具の技術の特質・変遷

日本国内では籐が育たないため、籐材は東南アジア諸国からの輸入に頼っている。近代日本初期は支那人を経由して高価な籐材を入手していた。そのため、昭和戦前期前半までは、太い骨組みには国内産の竹材を使用し、骨組みの湾曲部には丸籐（細い皮付籐材）を使用していた。そして、骨組みに皮籐/芯籐を巻き、座面・背面には皮籐/芯籐の編みを施していた。なお芯籐巻き/芯籐編みには塗装が必要である。

昭和戦前期後半以降、太民籐材の直輸入が本格化すると、太民籐材を骨組みに使用するものが見られ始めた。また昭和戦前期には、製材した木材を骨組みとして、その木部に皮籐/芯籐を巻き、クッションを設置するもの（文化椅子）も出現した。

そして、戦後は太民籐材の骨組みが一般的となった。

＜引用文献＞

1) 新井竜治「幕末・明治の籐家具デザイン」『日本インテリア学会大会研究発表梗概集』34, 2022, pp.25-26.
2) 新井竜治「籐製肘掛椅子「西京丸」・籐製三つ折り寝椅子の由来」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』68, 2021, pp.152-153.
3) 新井竜治「昭和戦前期百貨店の籐家具の特質」『日本インテリア学会大会研究発表梗概集』30, 2018, pp.81-82. ／ 新井竜治「昭和戦前期百貨店の籐家具の技術・デザイン・用途」『共栄大学研究論集』18, 2020, pp.19-34.
4) 新井竜治「進駐軍家族住宅の籐椅子デザインの由来」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2021, pp.701-702.
5) 新井竜治「日本の籐家具にみるモダニズムとポストモダニズム」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2022, pp.721-722.
6) 新井竜治「全国籐製品新作品評展示会の特質・意義・問題」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』69, 2022, pp.190-191.
7) 前掲 5)
8) 新井竜治「籐家具のコスガの沿革・デザイン・技術の概要」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2020, pp.171-172.
9) 新井竜治「籐家具のカザマの沿革・デザイン・技術・販売戦略の概要」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』67, 2020, pp.2-3.
10) 新井竜治「山川ラタンの沿革・デザイン・技術の概要」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』66, 2019, pp.190-191.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 新井竜治	４．巻 34
２．論文標題 幕末・明治の籐家具デザイン	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本インテリア学会大会研究発表梗概集	６．最初と最後の頁 25～26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 新井 竜治	４．巻 建築歴史・意匠（2022）
２．論文標題 日本の籐家具にみるモダニズムとポストモダニズム	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 721～722
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 新井 竜治	４．巻 69
２．論文標題 全国籐製品新作品評展示会の特質・意義・問題	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本デザイン学会研究発表大会概要集	６．最初と最後の頁 190～191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11247/jssd.69.0_190	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 新井竜治	４．巻 建築歴史・意匠（2021）
２．論文標題 進駐軍家族住宅の籐椅子デザインの由来	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 701～702
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 新井 竜治	4．巻 68
2．論文標題 籐製肘掛椅子「西京丸」・籐製三つ折り寝椅子の由来	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本デザイン学会研究発表大会概要集	6．最初と最後の頁 152～153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11247/jssd.68.0_152	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 新井竜治	4．巻 建築歴史・意匠（2020）
2．論文標題 籐家具のコスガの沿革・デザイン・技術の概要	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 171～172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 新井 竜治	4．巻 67
2．論文標題 籐家具のカザマの沿革・デザイン・技術・販売戦略の概要	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本デザイン学会研究発表大会概要集	6．最初と最後の頁 2～3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11247/jssd.67.0_2	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 新井 竜治	4．巻 66
2．論文標題 山川ラタンの沿革・デザイン・技術の概要	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本デザイン学会研究発表大会概要集	6．最初と最後の頁 190～191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11247/jssd.66.0_190	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 新井竜治	４．巻 18
２．論文標題 昭和戦前期百貨店の籐家具の技術・デザイン・用途	５．発行年 2020年
３．雑誌名 共栄大学研究論集	６．最初と最後の頁 19～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 新井竜治
２．発表標題 幕末・明治の籐家具デザイン
３．学会等名 日本インテリア学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 新井竜治
２．発表標題 日本の籐家具にみるモダニズムとポストモダニズム
３．学会等名 日本建築学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 新井竜治
２．発表標題 全国籐製品新作品評展示会の特質・意義・問題
３．学会等名 日本デザイン学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 新井竜治
２．発表標題 進駐軍家族住宅の籐椅子デザインの由来
３．学会等名 日本建築学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 新井竜治
２．発表標題 籐製肘掛椅子「西京丸」・籐製三つ折り寝椅子の由来
３．学会等名 日本デザイン学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 新井竜治
２．発表標題 籐家具のコスガの沿革・デザイン・技術の概要
３．学会等名 日本建築学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 新井竜治
２．発表標題 籐家具のカザマの沿革・デザイン・技術・販売戦略の概要
３．学会等名 日本デザイン学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 新井竜治
２．発表標題 山川ラタンの沿革・デザイン・技術の概要
３．学会等名 日本デザイン学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関